

## 第8章 総括

### 第1節 沼田城跡出土瓦の年代観と特徴

#### 1. はじめに

沼田城跡からは、これまでの調査で多くの瓦が出土している。これらの瓦は沼田城が真田家により近世城郭として本格的に整備される16世紀末から、廃城となる天和2年（1682）までの間に使用されたものと考えられ、初期の資料群は関東の諸城郭においても最古級のものと位置づけられる。

沼田城の瓦については、『沼田城跡2』報告（2019年、以下報文Ⅱ）において軒瓦文様の再検討を中心に分析したが、今回新たに確認されたものや他の瓦種も含め改めて整理する。なお、ここでは真田家段階の瓦を分析の対象とし、沼田城や周辺から採集あるいは伝世品として伝わる廃城以降と考えられる瓦については除外した。

#### 2. 概要

ここでは屋根瓦および瓦質の建築材料を瓦類（以下、瓦）とし、屋根の使用される位置によって形状の異なる瓦の形態を「瓦種」と称する。沼田城の真田家段階の瓦において、現在までに確認された瓦種は次のとおりである。（（）は可能性ある資料）

- ・軒瓦類  
軒丸瓦・軒平瓦
- ・地瓦類  
丸瓦・平瓦
- ・棟瓦類  
熨斗瓦・鳥伏間瓦・小菊瓦・（輪違瓦）・鬼瓦・鯨瓦
- ・隅瓦類  
隅軒平瓦・隅平瓦
- ・谷瓦類  
谷丸瓦・谷平瓦

このほかに瓦種不明の資料が少数出土している。

これらの瓦種は複数が組み合わさって一連の屋根を構成したものと考えられる。以下では、このような一連の屋根に使用された複数の瓦種の組み合わせを「セット」と表現する。沼田城の真田氏段階の瓦には複数のセットが存在し、使用時期の違いならびに複数の所用建物の存在を反映したものと考えられる。

#### 3. 各瓦種の概要および分類

分析にあたっては、最初に瓦種ごとに分類作業を行ったのち、瓦種間のセット関係の把握を試みた。これまでの城域における瓦の出土状況をみると、いずれの地点でも時期や規格の異なる複数のセット

が混在しており、遺構一括資料からのセット関係の把握は困難であるが、ここでは瓦の文様や調整の差からその復原を試みた。

以下、各瓦種について、その概要及び分類の概要を記す。

確認した瓦種のうち、隅軒平瓦・鳥伏間瓦については、軒丸瓦・軒平瓦と同一の瓦当文様を有するものについては分類番号を共通とした（鳥伏間瓦A-02類など）。丸瓦・平瓦については形状が単純で分類が難しいことから、また熨斗瓦・隅平瓦・鬼瓦・谷丸瓦・谷平瓦については出土資料が少数あるいは小片のみであることから、現段階では分類番号は未設定である。

分類番号は、各瓦種内で系統分けが可能なものについては、適宜A・B…の種別に大別し、それぞれ連番を付した。なお、種別や分類番号の並び順は、確認した際に順次設定しているため、年代の新旧や文様の類似性等を考慮したものではない。

## ○軒丸瓦

### ・概要

近世のスタンダードな軒丸瓦瓦当文様である連珠三巴文と、真田家の家紋と考えられる州浜紋が確認されている。ただし後者は現在のところ採集品1点のみで、発掘調査では出土していない。

連珠三巴文は、頭部の向く方向を基準として右巻・左巻と表現した（多くの報告書で逆の表現がなされているため注意されたい）が、8分類中7分類が右巻である。連珠三巴文には珠文帯と三巴文の間に圏線を有するものと有さないものが存在し、それぞれ複数の範がみられる。珠文数は16珠が5分類、不明が3分類であるが、不明品も復元すると16珠とみられ、斉一性が高いといえる。一部の資料は鳥伏間瓦と同範である。

体部（丸瓦部）が確認できた資料は、いずれも通常の丸瓦に近い長さのもので、釘穴1が穿たれている。

### ・分類

瓦当文様により分類した。連珠三巴文をA種、それ以外の文様をB種に大別し、範の違いによりそれぞれ連番を付した。B種は州浜紋1分類のみである。

A種：連珠三巴文（8分類）

従来確認されていた7分類のうち、A-03類に2範型が含まれることが判明したため、出土数のより少数のものをA-08類に設定し、計8分類とした。

B種：その他の文様（1分類）※本節末に参考図版を掲載

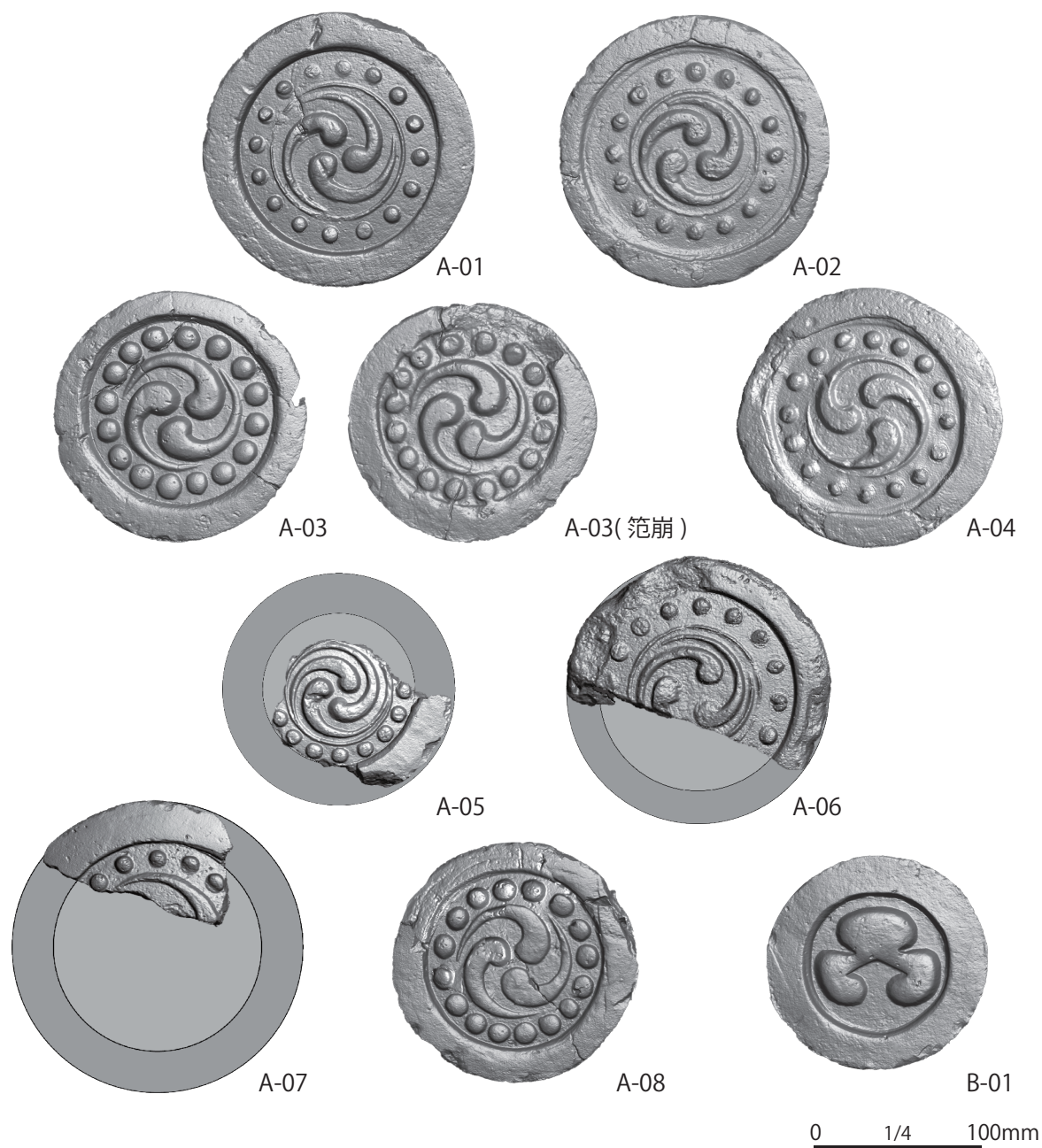
州浜紋1分類のみである。採集品1点のみが確認されているが、製作も古様であり真田家段階のものと判断した。

## ○軒平瓦

### ・概要

近世のスタンダードな軒平瓦瓦当文様である均整唐草文が配される。文様構成により大きく4種に大別される。

均整唐草文は、中心飾り（中央の文様）と左右に展開する唐草（巻き込みのある草状単位）や子



第152図 軒丸瓦文様一覧

表24 軒丸瓦分類一覧

分類	文様	セット関係	瓦当径	文様 区径	内径	特徴	推定年代	旧分類
A-01	連珠三巴文 (右巻 16 珠 圏線あり)	軒平 C-01 類	163	117	82	珠文はやや小さい。圏線あり。巴大きく尾は長く、頭部は丸い。 A-02 類よりも内径が大きい。	17 世紀中後	B-1b (大)
A-02	連珠三巴文 (右巻 16 珠 圏線あり)	軒平 C-02 類 or 軒平 C-03 類	156	117	74	珠文はやや小さい。圏線あり。巴はやや小さく尾が長く、頭部は丸い。A-01 類よりも内径が小さい。胎土褐色を帯びるものが多い。体部釘穴 1。全長 315・体長 280。鳥伏間瓦あり。	17 世紀中後	B-1b (小)
A-03	連珠三巴文 (右巻 16 珠 圏線なし)	軒平 B-01 類	150	109	67	珠文やや大きい。右下方の珠文 1 が小さい。巴頭部はやや大きく、一部変形する。範崩れの目立つ資料あり。金箔鳥伏間瓦あり。	17 世紀初	B-1a
A-03 (範崩)	連珠三巴文 (右巻 16 珠 圏線なし)	軒平 B-01 類	141	105	67	A-03 類のうち、左上及び下に範傷が目立ち、調整の雑な資料。硬質で文様は縮小する。体部釘穴 1。全長 308・体長 283。鳥伏間瓦あり。	17 世紀初頭	B-1a

A-04	連珠三巴文 (左巻16珠 圏線なし)	軒平 A-01 類 or 軒平 B-01 類	154	109	72	巴は間隙広く、頭部が尖る。体部釘穴1。全長308・体長288。鳥伏間瓦あり。	17世紀初	B-2
A-05	連珠三巴文 (右巻16珠 圏線あり)	軒平 C-01 類	139	90	68	珠文やや大きい。圏線ためて、巴尾部に接する。	17世紀中後	-
A-06	連珠三巴文 (右巻16珠 圏線あり)	軒平 C-04 類	160	114	79	珠文はやや小さい。圏線あり。巴は細長く、頭部は丸い。巴中央の空隙広い。胎土砂質。	17世紀中後	-
A-07	連珠三巴文 (右巻 圏線なし)	軒平 C-01 類	174	124		珠文小さく、巴大きい。資料は小片のみ。	17世紀中後	-
A-08	連珠三巴文 (右巻16珠 圏線なし)	軒平 D-01 類か	150	107	69	A-03 類に似るが珠文・巴頭部やや小さい。下方の珠文がやや小さく、珠文間が狭い。右上部巴の先端が尖る。	17世紀初	B-1a
B-01	州浜紋	不詳	130	80	65 × 73	真田家家紋。やや小型。周縁やや広め。州浜紋下方は矢印状に切り込む。	17世紀中後	-

単位 mm、\_\_は復元値

葉（巻き込みのない草状単位）から構成される。中心飾りは桐葉様下向三葉・上向三葉・蔦葉様下向五葉・上向五葉がみられる。

体部（平瓦部）が確認できた資料は、いずれも上端幅が下端幅（瓦当幅）よりも狭く、平瓦を上下反転した一般的な形状である。釘穴を有する資料は未確認で、平瓦にも明確に穿孔したものはみられないことから、釘穴は無かったものと思われる。

体部後方を斜めに切断した資料も見られ、隅軒平瓦と考えられる。他に少数であるが隅瓦の体部と考えられる釘穴・水返しを有する資料も見られた（報文Ⅱ第38図89）。

なお後述するが、A-01類は体部の良好に残る資料が未見で、葺平瓦の可能性が残る。

#### ・分類

瓦当文様により分類した。文様構成によりA種～D種に大別し、それぞれ分類番号を付した。D種は今回新たに確認したものである。

A種：桐葉様下向三葉の中心飾り、上・下2対の唐草を配するもの（1分類）

B種：上向三葉の中心飾り、下・上2対の唐草を配するもの（1分類）

C種：蔦葉様下向五葉の中心飾り、上・下2対の唐草および外向Y字状子葉を配するもの（4分類）

D種：上向五葉の中心飾り、下・上2対の唐草を配するもの（1分類）

### ○丸瓦

#### ・概要

平瓦とともに地瓦として多量に使用され、出土資料の多くを占める。厚さ、玉縁の長さ、裏面のコビキ痕や布目、胎土などに差異があり、複数の分類資料が存在することは確実であるが、破片では識別が困難なこともあり、現段階では分類作業を行っていない。

軒瓦との対比、胎土・調整の違いから大きく前期（17世紀初頭）と後期（17世紀中・後葉）に大別できる。以下に特徴を列記する。

- ・規格は体長270mm程度のものが中心を占め、復元可能なものについては、極端に大きいものや小さいものは未確認である（前期・後期）。
- ・玉縁の長さには若干の長短があるが、それほど長いものは見られない（前期・後期）。
- ・概して前期のものは調整が雑である。



第153図 軒平瓦文様一覧

表25 軒平瓦分類一覧

分類	文様	セット関係	瓦当幅	文様 区幅	瓦当 高	文様 区高	特徴	推定年代	旧分類
A-01	桐葉様下向三葉 - 唐草上下	軒丸 A-04 類 or 小菊 1 類		192	41	21	中心飾りに葉脈を表現した桐葉状の文様を配した均整唐草文。唐草は二重線となる。瓦当はやや低く、両端の脇区部分がやや高い。報文 I・山崎 2002 では、これを創建期の瓦に位置付けている。	17 世紀初	A
B-01	上向三葉 - 唐草下上連続	軒丸 A-03 類	266	199	50	27	中心飾りに上向き三葉を配した均整唐草文。中心飾りは太く、上部が広がって先端のみ尖る。唐草は先端が球状となり、第 2 唐草の基部は第 1 唐草の背に接する。焼成にばらつきが多く、灰色を呈するものから黒色のものまであり、胎土が黒色のサンドイッチ状を呈するものが目立つ。調整は概して雑で、文様面がつぶれたものが多い。体部長 305 程度。歪み多く計測値不整。隅瓦あり。	17 世紀初	B-2
B-01 (範崩)	上向三葉 - 唐草下上連続	軒丸 A-03 類	266	199	50	27	B-01 類のうち、第 2 唐草の基部が第 1 唐草から分離しているもの。範の磨滅によるものと考えられる。歪み多く計測値不整。	17 世紀初	B-2
C-01	柏葉様下向五葉 - 唐草上下・子葉	軒丸 A-01 類	350	226	63	31	中心飾りに柏葉様五葉を配する均整唐草文。中心飾りが線描で表現される。瓦当高が 63mm、推定幅も 1 尺以上と大きく、調整・焼成は丁寧である。	17 世紀中後	-
C-02	柏葉様下向五葉 - 唐草上下・子葉	軒丸 A-02 類	245	151	46	22	中心飾りに柏葉様五葉を配する均整唐草文。中心飾りは丸く配置された 3 葉と上部の左右小葉から成る。C-03 類に似るが、中心飾りがやや大きく、唐草の巻き込みが深い。体部長 287。	17 世紀中後	B-1 (大)

C-03	柏葉様下向五葉・唐草上下・子葉	軒丸 A-02 類	237/265	145	50	22	中心飾りに柏葉様五葉を配する均整唐草文。C-02 類に似るが、中心飾りがやや小さく、唐草の巻き込みが浅い。体部に大小がみられる。体部長 278。隅瓦あり。	17 世紀中後	B-1 (小)
C-04	柏葉様下向五葉・点珠・唐草上下・子葉	軒丸 A-06 類	240	136	53	27	中心飾りに柏葉様五葉を配する均整唐草文。中心飾りが肉厚で、左右下方に珠点あり。胎土はいずれも砂質で揃っている。	17 世紀中後	-
D-01	上向五葉・唐草下上	軒丸 A-08 類か			45	22	中心飾りに上向き五葉を配する均整唐草文。唐草は先端が丸みを帯び、全体に硬い表現。焼成にばらつきがある。瓦当厚い。調整はやや雑。中心飾り中央左上葉間に范傷。	17 世紀前	-

単位 mm、\_\_は復元値

- ・少数であるが、裏面に斜方向の糸切痕(いわゆるコビキA)を残す資料が含まれる(前期)。ただし、軒瓦では未確認で、セット関係は不明である。
- ・裏面にタタキ痕や抜取紐痕(吊紐痕)を有するものがみられるが少ない(前期・後期)。
- ・胎土は、前期のものには斉一性がみられないが、後期のものは砂質でおおむね揃っている。後期には褐色を帯びる胎土・表面色のものが含まれる。

## ○平瓦

## ・概要

丸瓦とともに地瓦として多量に使用され、出土資料の多くを占める。大きさや厚さ、表面の調整などに差異があり、複数の分類資料が存在することは確実であるが、破片では識別が困難なこともあり、現段階では分類作業を行っていない。

丸瓦同様、軒瓦との対比、胎土・調整から大きく前期(17世紀初頭)のものと、後期(17世紀中・後葉)に大別できる。以下に特徴を列記する。

- ・前期の資料は厚手でやや大ぶりの印象を受けるが、極端に大型・小型の資料は未確認である。
- ・概して前期のものは調整が雑である。
- ・下端小口上部面取りの大きいものや、やや内斜する資料がみられる(前期)。
- ・焼成前に上方や下方をを斜めに切断した資料がみられ、前者は隅平瓦、後者は垂れを省略した谷平瓦の可能性がある(後期)。
- ・裏面に斜方向の糸切痕(いわゆるコビキA)を残す資料が含まれる(前期)。
- ・1点のみであるが、刻印「剣片喰」を複数押した資料が確認されている(後期・第46図1)。
- ・草花をへう書きした隅瓦が確認されている(後期・第50図2)。
- ・胎土は、前期のものには斉一性がみられないが、後期のものは砂質でおおむね揃っている。後期には褐色を帯びる胎土・表面色のものが散見される。

規格については、大型の軒平瓦(C-01類)があることから大型品の存在も想定されるが、抽出していない。

## ○熨斗瓦

## ・概要

近世瓦には専用品が少ない瓦種であるが、焼成前に平瓦を縦半裁した資料がみられ(報文Ⅱ第40図103)、熨斗瓦と判断した。通常の平瓦と調整は差がない。出土数は少なく、城内の多くの建物で

は平瓦が流用されたと考えられる。

### ○鳥伏間瓦

#### ・概要

軒丸瓦と同じ瓦当文様を有し、瓦当の後方が筒状をなすものを鳥伏間瓦と判断した。いずれも軒丸瓦に同範資料が確認され、軒丸瓦の分類番号を襲用した。

A-02類は採集資料のみの確認である（※本節末に参考図版を掲載）。A-03類には2種が見られ、



第154図 鳥伏間瓦・小菊瓦文様一覧

表26 鳥伏間瓦分類一覧

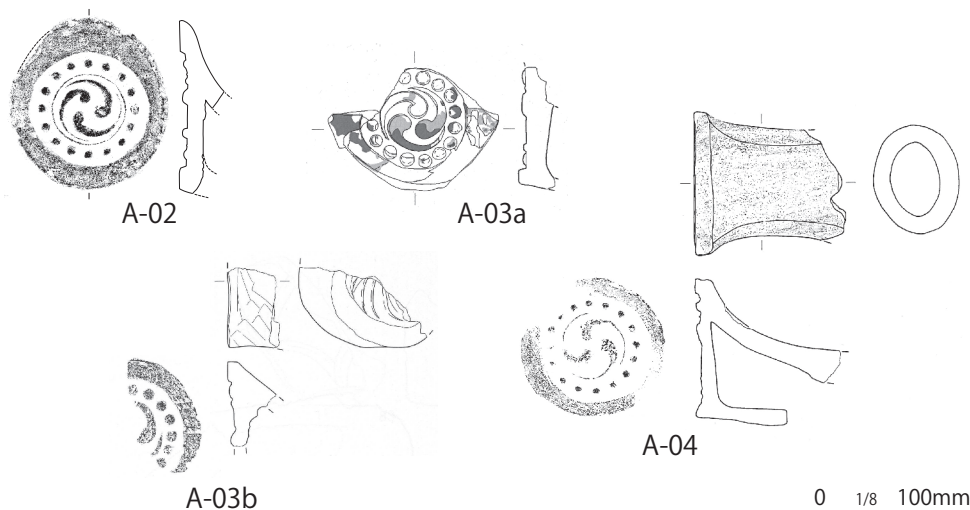
分類	文様	セット関係	瓦当径	文様 区径	内径	特徴	推定年代	旧分類
A-02	連珠三巴文 (右巻 16 珠 圏線なし)	軒丸 A-02 類 + 軒平 C-02 類 or 軒平 C-03 類	181 × 161	119	76	軒丸瓦 A-02 類と同範。瓦当楕円形を呈し、周縁上部が広い。	17 世紀中後	B-1b (小)
A-03a	連珠三巴文 (右巻 16 珠 圏線なし)	軒丸 A-03 類 + 軒平 B-01 類		107	70	金箔瓦。周縁・巴文にわずかに金箔と漆痕。瓦当部は眼状で左右が広がり尖る。文様は軒丸瓦 A-03 類と同範で、範崩れは見られない。軒丸瓦とは文様の上下が反転する。胎土は表面白色、内部黒灰色を呈する。	17 世紀初	B-1a
A-03b	連珠三巴文 (右巻 16 珠 圏線なし)	軒丸 A-03 類 + 軒平 B-01 類				軒丸瓦 A-03 類と同範で、やや範崩れがみられる。軒丸瓦とは文様の上下が反転する。	17 世紀初	B-1a
A-04	連珠三巴文 (左巻 16 珠 圏線なし)	軒丸 A-04 類 + 軒平 A-01 類	151	108	73	軒丸瓦 A-04 類と同範。瓦当円形。瓦当付根円筒で下部に切込あり。	17 世紀初	B-2

※分類番号軒丸瓦に共通。単位 mm、\_\_ は復元値

範崩れの少ない1点（A-03a）は金箔瓦である。

・分類

いずれも軒丸瓦と同範の資料である。体部が残るものが少ないため、形態を復元できるものがないが、伏間瓦が出土しないことから、体部後方は通常の丸瓦と同形であった可能性が高い。



第155図 鳥伏間瓦

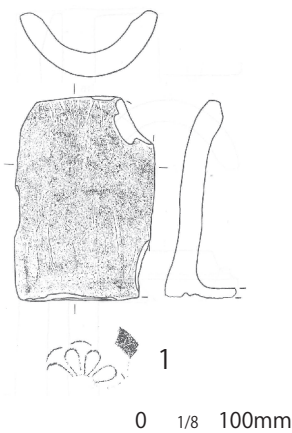
○小菊瓦

・概要

1分類のみで、従来菊花文の軒丸瓦（報文ⅠのA類）と認識されていたものである。小菊瓦としては比較的大型のもので、体部は丸瓦を切り縮め玉縁部分を砲弾形とした形状をなす。瓦当裏面の接合部は軒丸瓦と同様になるため、体部が脱落したものでは軒丸瓦の瓦当と区別できないが、同範資料で体部が丸瓦形のものは確認されていないこと、体部の確認点数と瓦当部の確認点数が近いことから、いずれも小菊瓦と判断した。

・分類

文様は陰弁8葉（註1）の八重菊文で、後方の花卉はやや大きく表現される。小菊瓦の文様としてはスタンダードな菊花文である。焼成は表面灰白色・胎土黒灰色を呈する資料が目立ち、鯪瓦・鬼瓦のうち古様の一群とのセット関係が想定される。おそらく一時期のみ、限定された建物に使用された物と考えられる。



第156図 小菊瓦

表27 小菊瓦分類一覧

分類	文様	セット関係	瓦当径	文様区径	文様径	花芯径	特徴	推定年代	旧分類
1	8弁八重菊	軒丸 A-04 類 + 軒平 A-01 類 or 軒平 B-01 類等か	133	100	96	12	大型。1 分類のみで、周縁内に花卉中央が凹む八弁の八重菊文を配する。報文Ⅰでは軒丸瓦 A 類としているが、体部の形状、文様から見て小菊瓦である。体部には粗い刺子の布目とコビキ B が見られる。	17 世紀初	軒丸 A

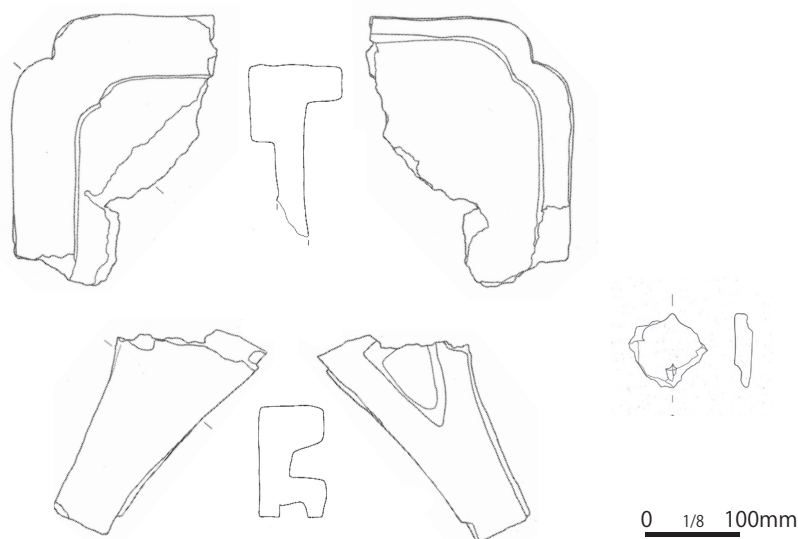
単位 mm、— は復元値

## ○鬼瓦

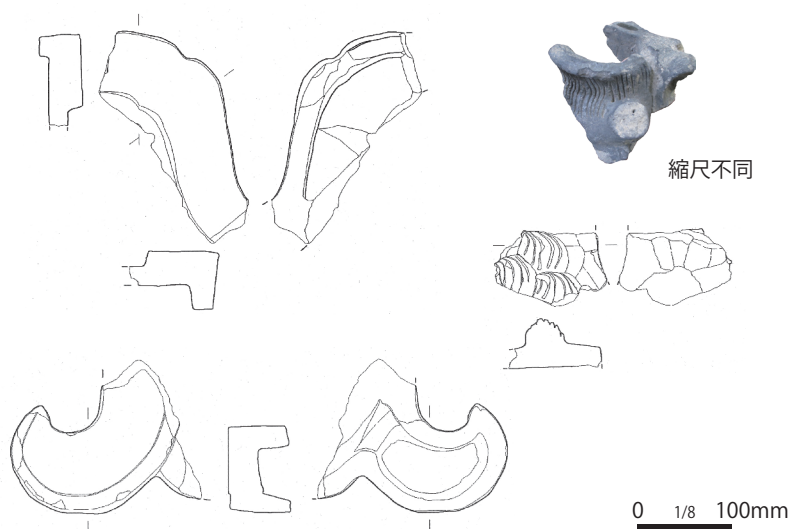
## ・概要

胎土や調整から、平瓦・丸瓦同様前期・後期に大別できる。いずれの時期のものも様々な形状のものが存在するようだが、大半が破片資料で全形を把握できるものがない。以下に特徴を列記する。

- ・鬼面の鬼瓦が含まれる（前期・後期）。
- ・文様が不明だが、家紋瓦らしきものが存在する（第14図4）。
- ・表面が灰白色、胎土内部が黒灰色を呈する資料が散見される（前期）。
- ・胴部の周縁には文様がなく、無地である（前期・後期）。
- ・裏面は内を刳って側を削り出す形で製作されたものが多い（前期・後期）。



第157図 鬼瓦（前期）



第158図 鬼瓦（後期）

## ○鯨瓦

## ・概要

鯨瓦は一遺跡における出土点数は多くなく比較資料が少ないうえ、形態のバリエーションも豊富なため、年代差や系譜を認識することは難しい。本遺跡の資料も複数の種類のものが混在して出土しているが、胎土・調整から1類が先行、2類が後出と考えられる。

## ・分類

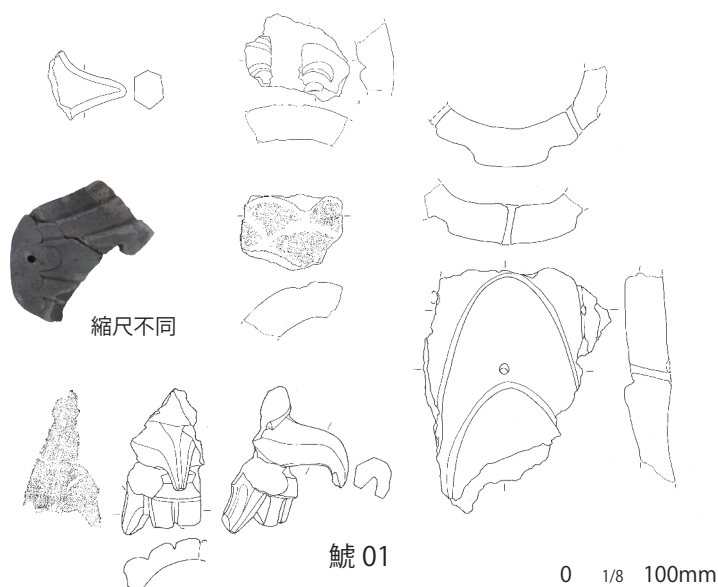
破片資料が多く、全形を捉えうるものが少ないが、識別が可能な2種に分類番号を付した。鱗の表現にヘラ描き（1類）とスタンプ（2類）がみられる。

1類は、報文Ⅱで大型品としたもので、鯨の鼻先が下向きL字状に突出し、異形である。表面が灰白色、内部が黒灰色を呈し、焼成に特徴がみられる。似た焼成のものは、鬼瓦の一部や鳥伏間瓦、小菊瓦などの棟瓦に散見され、軒瓦や地瓦にはあまり見られないことから、地瓦とは製作体制が異なっていた可能性がある。出土資料はいずれも大型で、同一個体の可能性がある。古様で17世紀初頭の資料とみられる。

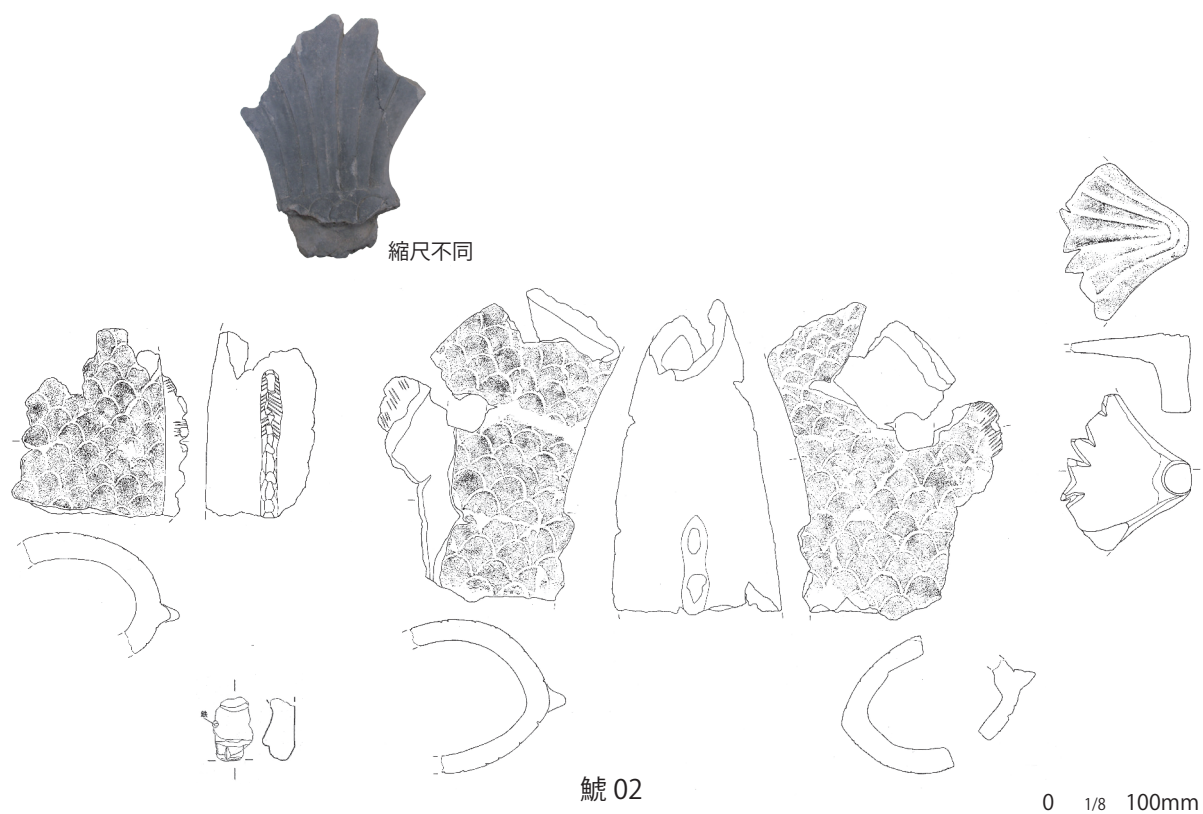
一方2類は小型品としたもので、胎土が砂質で、灰色の焼成である。印象としては軒平瓦C種の一群に近く、おそらく17世紀でも中葉以降に属する可能性が高い。こちらは中型の資料で、複数個体が存在する。

表28 鯨瓦分類一覧

分類	文様	セット関係	特徴	推定年代
1	鯨	軒丸 A-04 類 + 軒平 B-01 類 or 軒平 B-01 類等か	大型。胎土表面灰白、内部黒灰色のサンドイッチ状を呈する。鱗ヘラ描き。鼻先突出。	17 世紀初
2	鯨	軒平 C 種等か	中型。胎土砂質。鱗スタンプ。尻鰭別造。2 個体以上が存在。	17 世紀中後



第159図 鯨瓦（1類）



第160図 鯰瓦 (2類)

## ○隅軒平瓦・隅平瓦

## ・概要

軒平瓦と同様の瓦当文様を有し、瓦当の後方を斜めに切断した資料を隅軒平瓦と判断した。瓦当文様が同範のものは、軒平瓦の分類番号を襲用した。軒平瓦の体部を左右斜めに切断したものと、左右2面を接合した一体型のものがあるが、後者は確認されていない。いずれも軒平瓦と同範の資料である。小片であるが体部後方を思われる資料も確認されている。

後方を斜めに切断した平瓦は隅瓦の可能性が高い。分類番号を付していないが複数が確認されている。草花文をへう描きした資料が出土している。

## ・分類

軒平瓦B-01類 (第101図5)、C-03類 (第54図3) の同範資料が確認されている。ともに焼成前に体部を斜めに切断している。破片では識別できないため、分類は軒平瓦に一括した。

## ○谷丸瓦・谷平瓦

## ・概要

出土数が少ないため、分類番号は設定していないが、斜めに切断した丸瓦・平瓦の下部に垂れを付した典型的な谷瓦が存在する (第18図1)。この他、平瓦の下部を斜めに切断し、垂れの見られない資料があり、谷平瓦として使用された可能性がある。

胎土・調整から、17世紀中・後葉に属する可能性が高い。

## ○その他の資料

### ・概要

丸瓦を輪切りにした形状のものがみられ（報文Ⅱ第42図105）、輪違瓦あるいは面戸瓦等の可能性がある。

## 4. 瓦のセット関係

一建築に使用される瓦は、基本的に一組の軒丸瓦・軒平瓦と他の瓦種のセットとなるものと思われる。しかし天守のような重層建築では一層目と二層目、あるいはそれ以上の層で軒瓦の文様や規格が異なる可能性もあるため、複数の軒瓦がセットとなる可能性もある。（ただし多くの場合識別は困難である。）

## ○軒瓦の組み合わせとセットとなる他瓦種

軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせの把握は、瓦の分析において最も重要なポイントのひとつである。沼田城の軒瓦の組み合わせについては報文Ⅱにおいて既述したが、ここでは新たな分類資料を加え、系譜・年代観の把握の容易な軒平瓦を軸に、組となる軒丸瓦、その他の瓦種を含めて組み合わせを整理する。現在想定しているセットは次のとおりである。

### ① 軒平瓦A-01類—軒丸瓦A-04類（他のセット候補：小菊瓦1類・鯨瓦1類・鬼瓦の一部）

桐葉様の葉脈を有する下向三葉文を中心飾りとし二重線の唐草を配する軒平瓦A-01類は、巴の先端が尖る古式の連珠三巴文軒丸瓦A-04類との組み合わせが想定される。

他にセットとなる瓦として、まず八重菊文の小菊瓦1類が想定される。小菊瓦1類は、胎土や焼成からは次の②（軒平瓦B-01類を指標とするセット）に属する可能性も残るが、洗練された文様の印象から、一応本セットと判断した。類似の文様や体部形態を持つ資料が、真田家の本城である信濃上田城や京都伏見城で確認されており、中央の瓦の影響下に製作された可能性が高い。

鱗手彫りの鯨瓦1類、および鬼瓦のうち胎土が砂質のものを除く一群（砂質のものは軒平瓦C種に伴うと推定）も、本セットもしくは②のセットを構成する可能性が高い。これらの資料には表面が白色を呈し、内部が黒みを帯びる胎土のものが目立つ。

疑問の残る点として、上記の組み合わせにおいては、既出土資料では軒丸瓦に対し軒平瓦の出土量がやや少ない。調整の印象からは軒丸瓦A-04類が次の②軒平瓦B-1類と組み合わせる可能性も残るが、軒丸瓦A-03類の一部はほぼ確実に軒平瓦B-1類とセットとなると考えられるため、その場合軒平瓦1分類に対し軒丸瓦2分類が対応する可能性も考慮する必要がある。

別の可能性としては、軒平瓦A-01類が小菊瓦1類と組となり、葦瓦を形成するという構成が考えられる。小菊瓦1類は丸瓦様の長めで高さのある体部を有し、軒平瓦（とした）A-01類の体部の奥行きが、小菊瓦の体部に納まる長さであれば、葦平瓦と判断できる（この場合、小菊瓦1類は葦丸瓦とすべきであろう）。ただし現状では軒平瓦A-01類の体部が良好に残る資料を確認していない。両者が葦瓦のセットとして独立するなら、御殿など総瓦葺きではなく「葦棟」の建物の存在も考慮されよう。

なお、沼田城ではわずかながらコビキAの瓦が存在する。軒瓦との対応関係が不明瞭であるが、

いずれにしろ17世紀の早い段階で消滅するものと考えられ、本セットもしくは②のセットに伴うものと判断される。

#### ② 軒平瓦B-01類—軒丸瓦A-03類（他のセット候補：小菊瓦1類・鯨瓦1類・鬼瓦の一部）

太い上向三葉を中心飾りとし太身の唐草を配する軒平瓦B-01類は、珠文が大きく巴頭部が肥大する軒丸瓦A-03類と組をなすことが、調整の類似性や出土数から判断してほぼ確実である。ともに範の摩滅の少ないものから大きく範崩れしたものまでが混在し、特に範崩れの目立つ資料では調整が雑な点もよく似ている。

軒丸瓦A-03類は、同範の鳥伏間瓦が存在し、うち1種(a)に金箔瓦が存在する。瓦当の両脇が尖る異形で、範崩れが見られずまた範が軒丸瓦と上下逆となっている。別に瓦当円形とみられる資料もあり(b)、こちらは範崩れがやや目立つが、同様に範は逆位のようなものである。こちらは金箔は確認されていない。

上述のとおり軒丸瓦A-04類が軒平瓦B-01類のセットの一部をなす可能性もある。いずれにしろ金箔瓦の存在からも、①・②のセットが沼田城では最古様の一群であることは確かである。

#### ③ 軒平瓦D-01類—軒丸瓦A-08類か

今回新出の、上向五葉を中心飾りとし単線の唐草からなる軒平瓦D-01類は、出土数が少なく明確なセットを把握できないが、軒平瓦B-01類—軒丸瓦A-03類との近似性を考慮すれば、軒丸瓦A-03類に似て、やや巴の小さい軒丸瓦A-08類と組となる可能性がある。

#### ④-1 軒平瓦C-01類—軒丸瓦A-01類／A-07類か（他のセット候補：鯨瓦2類・鬼瓦の一部・谷丸瓦・谷平瓦）

軒平瓦C種は、出土状況や調整の近似性から、圏線を有する連珠三巴文軒丸瓦（A種）と組となることが確実である（④）。このうち規格の大きい軒平瓦C-01類は、圏線を有する軒丸瓦A種のうち最大径である軒丸瓦A-01類と組となる可能性が高いが、径から判断すると軒丸瓦A-07類と組となる可能性もある（ただし巴文に圏線はなく、若干様相が異なる）。軒丸瓦が未出の可能性もあり、要検討である。

鯨瓦2類や鬼瓦の多くは砂質の胎土を有し、これらは軒平瓦C種のセット（④）に含まれる可能性が高い。出土数の多い軒平瓦C-02類（④-3）あるいはC-03類のセット（④-4）に属する可能性が高いが、明確に識別できない。

#### ④-2 軒平瓦C-04類—軒丸瓦A-06類（他のセット候補：鯨瓦2類・鬼瓦の一部・谷丸瓦・谷平瓦）

軒平瓦C-04類は、C種の中でも調整がやや異なり、胎土の砂質味が強い。砂質の胎土で同じく出土数の少ない軒丸瓦A-06類と組となる可能性が高い。

#### ④-3 軒平瓦C-02類—軒丸瓦A-02類／A-01類（他のセット候補：鯨瓦2類・鬼瓦の一部・谷丸瓦・谷平瓦）

軒平瓦C-02類とC-03類は文様の大きさがやや異なるが、調整がよく似ている。いずれかもしくは両方が軒丸瓦A-02類と組となるものと考えられるが、軒丸瓦A-01類も近い文様であり、こちらと組となる可能性も残る。

#### ④-4 軒平瓦C-03類—軒丸瓦A-02類（他のセット候補：鯨瓦2類・鬼瓦の一部・谷丸瓦・谷平瓦）

軒平瓦C-03類はC種の中で最も文様が縮小しており、軒丸瓦A-02類と組となるものとみて間違

いない。胎土・焼成も近似しており、両者ともに出土数が多い点もこれを裏付ける。ただし、類似する軒平瓦C-02類に対応する軒丸瓦が特定できないため、識別しきれていないが軒丸瓦A-02類に複数範が含まれている可能性もある。

以上の他に軒丸瓦A-05類/B-01類が残るが、いずれも1点のみの出土であり、対応する軒平瓦を明らかにしえない。

## 5. 瓦の出土状況

真田期とみられる瓦は、城内各所すべての調査地点で出土している。出土遺構については、瓦を一括廃棄した土坑等は見当たらず、その多くが破城時の一括廃棄を主とする包含層からの出土である。

大部分を占める破城時の一括廃棄とみられる資料は、初期のものから破城に近い時期のものまで幅広い年代のものが混在した状況で出土している。出土状態を見ても、新旧の瓦の遺存度の差は認められず、ともに屋根から下ろしてそのまま廃棄されたものとみられ、遺存状況が非常に良い。

各地点の包含層内から出土した資料については、破片である場合が多いが、こちらも新旧混在した状態で出土する事例が圧倒的であるが、特徴ある出土状況を示すものとしては、次の地点が挙げられる。

### ・天守推定地点

下層から出土した瓦には、17世紀中・後葉段階とみられる資料が確認されていない。基礎を含めた天守の修築を示すものかもしれない。

### ・本丸堀前段階の堀跡（SD2）

出土数はわずかであるが、上層から軒丸瓦A-03類の小片が出土しているほか、中層から丸瓦の良好な資料が出土している。ともに前期段階の瓦とみられるが、軒丸瓦A-03類は範崩れが進んだ資料である。SD2が廃絶する段階で、すでにある程度城内で瓦が使用されていた可能性がある。

瓦種別の分類資料ごとの出土状況については、破城にあたって解体された建物の瓦が隣接する堀などに投棄されることによって、近隣に所在した建物の瓦の利用状況が明らかにされることが期待されるが、現段階では明確な偏りはとらえられていない。しいて言えば、大型の軒平瓦C-01類が本丸の東寄りの本丸堀北側および南側、軒平瓦C-04類が同本丸堀北側および南側のみで出土しているが、いずれも点数が少なく、明確な傾向としてはとらえ難い。

## 6. 瓦の年代観

沼田城の瓦の年代については山崎信二の分析があり（山崎2008）、軒瓦の組み合わせ等に若干認識の違いがある点を除けば、おおむね妥当なものとする。

これまでの調査をもとに整理すると、以下のとおりとなる。上記の①～④のセットでいえば、調整の雑な古様のセット（①②）と、調整の丁寧な新しいセット（④）に分けられ、この中間に位置すると思われるのが、③のセットと考えられる。

○初期の瓦群（①②）：17世紀初頭以前

沼田城で最古に属すると思われるセットは、軒平瓦A-01類を指標とするもの(①)と、軒平瓦B-01を指標とするもの(②)の2セットがあるが、ともに古様を呈し、沼田城の瓦葺の初期段階に属するものと判断される。前者は左右周縁の狭い二重線の華奢な文様、後者は素朴で重厚な文様の軒平瓦であり、印象は大きく異なる。組となる軒丸瓦が前者で軒丸瓦A-04類、後者で軒丸瓦A-03類に絞られれば、前者は小菊瓦1類を含む中央の影響を強く受けたセット、後者は在地色が強いセットとも考えられる。

本段階に属する小菊瓦1類や軒平瓦A-01類は、伏見城や上田城(真田期)の資料と近似性がみられる。真田期の上田城は関ヶ原の戦い後の慶長6年(1601)に一旦破却されていることから、これらの資料はそれ以前、慶長初年に遡る可能性がある。

②のセットは、軒丸瓦・軒平瓦共に範の状態の良いものと、範崩れの進んだものが存在することから、ある程度の期間継続的に製作された様子がうかがわれる。古色であり、かつ出土量が多いことからみて、沼田城初期の一連の普請に伴う可能性が高い。瓦の初現期をどの段階に想定するかによるが、慶長2年(1597)もしくは慶長12年(1607)とされる天守の竣工、同9年(1604)の水の手郭大門の竣工を含む慶長年間に置くのが無難かと思われる。①のセットがこれより前にあたるのか、後出するのか、はたまた同時期になるのかは現段階では判断できない。

本段階の資料群は、同範の瓦においても製作が丁寧なものから雑なもの、また焼成も良好なものから軟質なものまでさまざまである。胎土にも多くのバリエーションが見られ一定しない。複数の職人集団や、技術未熟な工人が動員されて製作に携わっていた可能性を示唆する。

#### ○中間期の瓦群(③):17世紀前葉

出土数が少ないが、軒平瓦D-01類を指標とする、初期段階の資料と後期の資料との中間的な印象のセットである。軒平瓦D-01類は3点が確認されているがいずれも製作が雑で、唐草文様の表現も含め軒平瓦B-01類(②のセット)に似る。一方で左右周縁が広く、平部の反りが大きいなど様相が異なる部分も見られる。2点が確認された中心飾り部分にはともに範傷が見られ、ある程度使用されている印象だが、範の状態の良いものは見られない(ただしセットの可能性を想定している軒丸瓦A-8類には範の状態の良い資料が含まれる)。

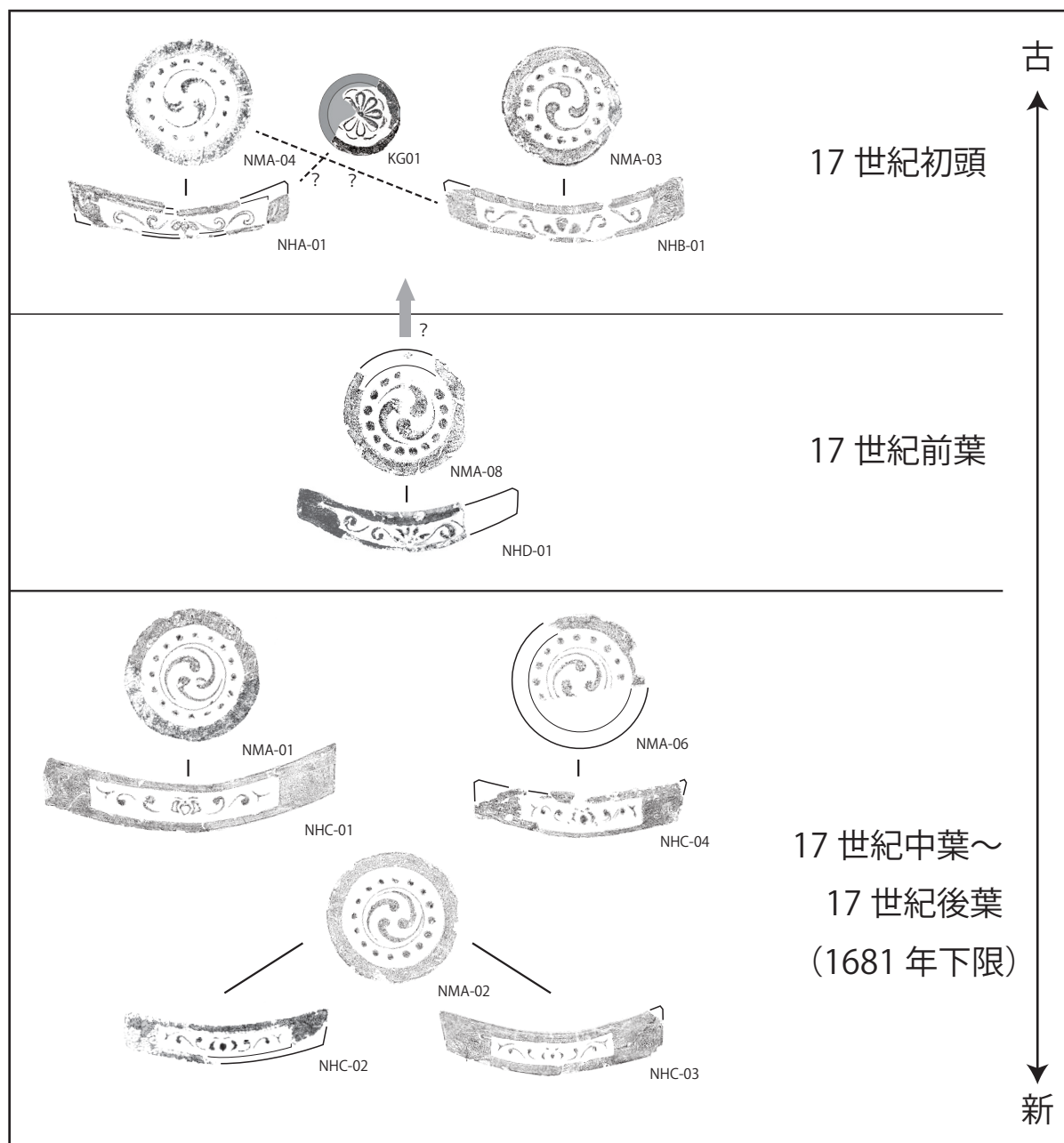
量比から見て、他で使用された本格的な普請の終了後、軒平瓦C種を指標とする17世紀中・後葉の大規模な普請までの間(寛永期前後か)に行われた小規模な作事に伴うものとみておきたい。

#### ○後期の瓦群(④-1~4):17世紀中・後葉

軒平瓦C種及び圏線を有する連珠三巴文軒丸瓦を指標とする一群は、初期の資料群とは様相が大きく異なり、おおむね斉一性の高い技術や胎土で製作されている。軒瓦の文様も同系統であり、同一の工房で継続的に製作されたものと考えられる。

圏線を有する軒丸瓦の連珠三巴文や、軒平瓦瓦当上部の面取りの存在は、17世紀中葉以降定型化する江戸在地系の瓦との近似性をうかがわせる。織豊期よりも江戸期の瓦という印象で、江戸遺跡における明暦の大火(1657年)罹災資料よりも、やや後の段階のものに近い印象である。

軒平瓦C種には複数範が存在し、デザインに若干の変化が認められる。特にC-04類は他の3範型



第161図 軒瓦・小菊瓦の変遷

と比べ趣が異なるため、これらに先後関係があるかが問題となるが、現段階ではそれほど大きな時期差はないと考えたい。記録には万治元年（1658）、寛文5年（1665）に天守や門の修復がなされたとされるものがあるが、本群はこの時期以降の所産として矛盾なさそうである。

## 7. 瓦の初現年代

沼田城における瓦の初現年代をどこに置くかは、城の歴史を知るうえで極めて重要である。最古様の瓦が上記①あるいは②のセットであることは疑いないところであるが、これを暦年代に対応させる作業は難しい。

大部分の出土瓦は破城時の一括廃棄をはじめ、混在した出土状況を示すため、遺構の時期との対比

により年代を把握することは現状では難しい。ただし初期の遺構で唯一、時期差を考慮しうる廃城時の本丸堀に先行する堀SD2からも瓦が出土することを考慮すれば、沼田城が近世城郭化する早い段階で瓦が導入された可能性が高い。一方でSD2から出土した軒丸瓦A-03類は範傷の進行したものであり、混入の可能性も除外できず、また中層から出土している丸瓦についてもコビキBで、極端に古い印象は感じられないことから、SD2自体の廃絶年代も含め、慎重な検討が必要である。

沼田城の瓦には、わずかながらコビキAが確認される。ただし実見した印象ではコビキBの資料が圧倒的多数で、初現期の瓦においてもすでにコビキBが中心を占めていたものと思われる。コビキAの資料が異なるセットに由来するのか、初期のセットにコビキAとBが混在するのかについては検討の余地があるが、初期資料の製作のばらつきの多さから見て、現段階では後者と考える。

コビキBが主体を占める点からも、初期の瓦が真田家による沼田城の改修が開始された天正年間に遡る可能性は低い。真田信之が伏見城の普請に文禄3年（1594）ごろから参加したとされる点も考えあわせれば（倉澤2017）、最初の瓦の導入は天守が完成したとされる慶長年間以降と考えるのが無難であろう。

## 8. 瓦の規格

瓦の規格性については十分に整理しきれていないが、軒平瓦C-02類には体部大・小の2種があり、17世紀前半以前の平瓦は全体に若干規格が大きいような印象を受ける。一方軒丸瓦の瓦当径には小差があるが、丸瓦の状態の良いものと見ると、それほど大きな規格差は認められない。

軒瓦で規格の異なるものとして、軒平瓦C-01類が挙げられる。瓦当幅がとびぬけて大きく、調整も丁寧なことから、天守などの主要建築に使用されたことは疑いない。万治・寛文期の天守修復が事実であれば、この際に使用された可能性も考えられよう。他に軒丸瓦A-07類も大型品とみられるが、小片で詳細不明である。

1種のみ確認されている小菊瓦は同種の資料としては大きい。前述のとおり、体部の形状から一般的な小型のものとは使用形態が異なる（葺瓦など）可能性もある。

## 9. 金箔瓦と家紋瓦

### ○金箔瓦

沼田城の瓦を考える上で、重要な要素のひとつが金箔瓦の存在である。従来報告されていた金箔瓦は1点のみで、鬼瓦様の厚手の瓦片の表面にわずかに金箔が残るものであった（報文I第55図7）ため、後世の付着の可能性も含め、その性格は不明瞭であった。

今回の一連の調査で、新たに鳥伏間瓦等に金箔瓦が確認された。今回確認された金箔瓦についても金箔の残りは非常に悪いが、下地の漆らしき痕跡が確認される点、瓦種が（金箔瓦が使用される事例の多い）鳥伏間瓦等である点からも、漆地に金箔を押した金箔瓦と判断している。

今回確認されたものは2点であるが、このうち1点の鳥伏間瓦は、軒丸瓦A-03類のうち範傷のない資料と同範とみられる（第59図2）。金箔瓦が前回確認された鬼瓦様の資料とともに棟瓦2種で確認されていることは、その使用方法をうかがう上で興味深い。なお、もう1点については小片で瓦種を特定し得ないが、軒丸瓦様の周縁に金箔が残る資料である（第47図6）。

これらの金箔瓦は文様や調整から見て、上記①あるいは②のセット（17世紀初頭以前）に含まれることが確実である。鯰瓦1類や小菊瓦1類には、これらの金箔瓦と焼成が類似したものが多く含まれ、確認されていないが、これらの棟瓦には金箔瓦が含まれている可能性もある。

金箔瓦が使用された建物については想像の域を出ないが、天守や門、豊棟の棟瓦とすれば御殿建築への使用も考えられる。小片の資料が軒丸瓦かどうかははっきりしないが、現段階では建物の棟のみへの使用と考えておきたい。

### ○家紋瓦

確認された家紋瓦は少ない。真田家の家紋は六文銭（六連銭）が有名であるが、これが使用された瓦は確認されておらず、替紋とされる州浜紋の資料のみがみられる。

軒丸瓦B-01類は、丸枠内に肉厚の州浜紋を配したもので、かつて採集されたとされる1点のみが知られている。やや小型で体部を欠くが、調整から見て真田家段階のものと判断した。類品が見られないため、屋根の棟端など特殊な位置でのみ使用されたものかもしれない。

今回新たに鬼瓦に家紋の可能性のある資料が確認された（第14図4）。中心飾りの一部とみられ、上部に葵葉状の文様、下部に剣形の割り込みが確認される。焼成から古い段階の資料と考えられるが、全形は不明である。

### ○菊紋・桐紋

従来沼田城の瓦については、金箔瓦の存在に関連して、桐紋や菊紋（註2）の使用が指摘されてきた（木戸1995他）。両紋章は豊臣秀吉が朝廷から使用を認められ、配下の大名に使用を許したとされることから、豊臣政権との関連を示すものとされている。

沼田城では、かつて軒平瓦A-01類の中心飾りが桐紋、後者は小菊瓦1類（報文Ⅰ分類では軒丸瓦A類）が菊紋の使用例とされてきた。

しかし軒平瓦A-01類については、三葉の部分は桐紋に類似するものの花房の部分がなく、桐紋と解するのは困難である。これについては、桐紋への敬意や時代の変遷による省略などが理由ともされているが（木戸1995・小山2015）、本例ではデフォルメも進んでおり、本来桐紋に由来するものかどうかは別としても、桐「紋」を明瞭に意識したものとは考えにくい。単に唐草文の一様式として使用されているのではなかろうか。

小菊瓦1類の菊紋についても、軒丸瓦や鬼瓦に使用されるものと異なり、小菊瓦に利用されたスタンダードな文様と解するのが適当と考える。近世段階には軒丸瓦に連珠三巴文、軒平瓦に均整唐草文、棟飾瓦の一種である小菊瓦には菊花文を配するのが定番となっていくが、これらは特に家紋などの紋章を意識したものではない。他の瓦種への使用例がないことを考えても、こちらも菊「紋」と解するのは厳しいといえよう。

同じく真田信之の城であった上田城では、同種の小菊瓦とともに軒丸瓦の出土も知られている（倉沢1994他）。これについては解釈の難しい所であるが、瓦当径の小さい点からみて、棟の一部に使用する瓦であった可能性を指摘したい。

## 10. まとめ—沼田城の瓦の特徴—

最後に沼田城の瓦の特徴としてとらえられた点をいくつか挙げておく。

・初期（17世紀初頭）と後期（17世紀中・後葉）の、様相の異なる大きく二段階の資料が中心的に存在する

初期の資料群が概して製作が雑で斉一性に乏しいのに対し、後期の資料群は文様や調整に斉一性が高い。両者に技術的な連続性は見いだせず、時間差による断絶があるか、異なる製作集団によるものである可能性が高い。初期の資料については、さらに複数の製作集団が存在した可能性がある。

・金箔瓦の存在や、初期資料の一部に洗練された文様が見られる点などに、中央の瓦の影響がうかがわれる

金箔瓦は、桃山建築の一要素として、沼田城の建築にも利用されていたものと思われる。初期のセットの一部に含まれる文様が繊細な資料（軒平瓦A-01類・小菊瓦1類）とともに、いわゆる織豊城郭の要素として導入されたものと考えられよう。時期的には、現段階では真田家が伏見城普請に動員されたとされる文禄期よりも後、慶長初年と考えておきたい。これらの瓦は特徴的な胎土や、概して雑な製作からみて在地産と考えられるが、範が他地域から持ち込まれている可能性もありそうである。

・破城時廃棄と推定される瓦は、新旧が混在した状態で出土する

出土状況から、瓦葺導入時の建物のうち一定数は破城時まで存在しており、そこに残された古い瓦群が最終的に新規（あるいは葺替）による新しい瓦群とともに一括廃棄されたものと推定される。

真田期沼田城の瓦は17世紀末までに時期が限定されることもあり、創建期から江戸前期までの瓦を知る上では好適な資料である。破城を受けているため資料の取り扱いには慎重を要するが、中世城郭から近世城郭への転換がなされていく様子を、瓦からシンプルにとらえられる好例といえる。

今後さらなる分析によって、近世城郭への瓦の導入の実態が解明されることに期待したい。

## 註

1.報文Ⅱでは16弁（重弁）菊花文としたが、8弁の八重菊文と表記を改めた。これらは複弁・重弁と称する場合もあるが、古代蓮華文の複弁あるいは重弁表記とは異なるため、ここではこれらの表現を避けた。また、花卉中央の凹むもの（本資料のごとく）について「裏菊」と称する場合もあるが、意図的に用いたものとは考え難いため、陽弁（花卉の膨らむもの）・陰弁（花卉の凹むもの）の表記を用いている。

2.紋と文の表記について、ここでは家紋などの紋章については「紋」、それ以外の文様については「文」を使用した。

## 参考文献

木戸雅寿1995「織豊期城郭にみられる桐紋瓦・菊紋瓦について」『織豊城郭』第2号

倉澤正幸1994「上田城跡出土瓦の変遷について」『千曲』第83号

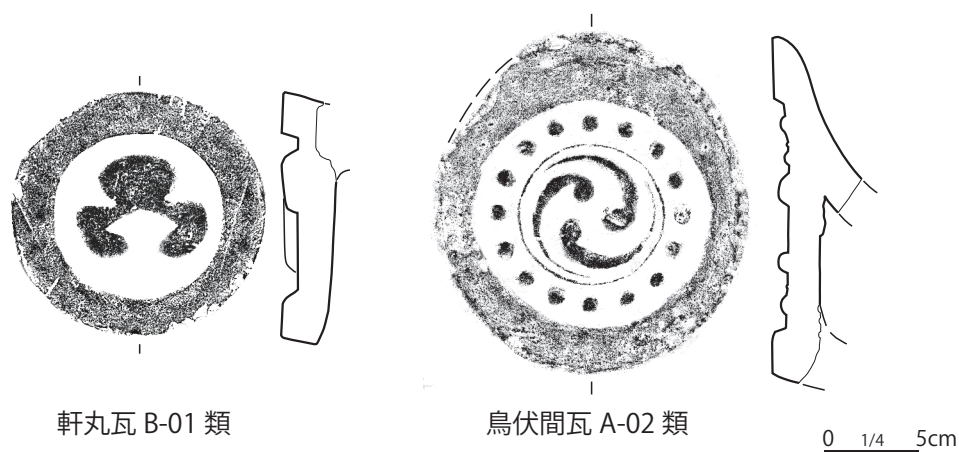
倉澤正幸2017「真田・仙石氏時代における上田城の一考察」『千曲』第164号

小山雅人2015「花のない桐文をめぐる」『京都府埋蔵文化財情報』第125号

山崎信二2008「近世群馬の瓦」『近世瓦の研究』

報文Ⅰ：沼田市教育委員会2001『沼田城跡 沼田公園長期整備構想に伴う沼田城跡発掘調査報告書（平成12年の調査を中心として）』

報文Ⅱ：沼田市教育委員会2019『沼田城跡 沼田公園長期整備構想に伴う沼田城跡発掘調査報告書（平成27年度・28年度調査）』



第162図 〈参考資料〉城内採集の瓦（出土地不詳）